

## 報 告

## 看護大学における小児看護学実習の指導方法の検討

—重症心身障害児施設見学実習での学習内容の分析—

藤原 理恵子<sup>1</sup> 今村 美幸<sup>1</sup> 上野 瞳<sup>1</sup>  
山田 雅代<sup>1</sup> 弓取 由美<sup>1</sup>

## 抄 録

本研究は、重症心身障害児（以下、重症児）施設の1日見学実習における学生の学びを分析し、今後の小児看護学実習のあり方を検討することを目的とした。

見学実習後の学生のレポートを質的に分析した結果、【重症児（者）の特徴の理解】【重症児（者）が生活する環境の理解】【重症児（者）とのかかわり方】【重症児（者）に必要な看護援助】【家族への看護支援】【看護観の深まり】という6つのカテゴリーが抽出された。

記述内容の分析から、学生が「実際に目にしたこと」は、指導者の「説明内容」が加わることにより、学生の印象に強く残ることが示唆された。学生が、「目にしたこと」と「説明されたこと」から考え、学生が意識的に学びに変えることができるよう、教員と指導者の教育的かわりが必要である。さらに、重症児（者）や家族と実際にかかわり、学生が体験の中から自ら悩み学ぶことのできる実習方法の検討が必要である。

**Key words:** 重症心身障害児施設、小児看護学実習、学生の学び

## 1. はじめに

小児看護の対象は、健康な子どもから健康障害のある子ども、障害をもつ子どもなど多岐にわたる。本学の小児看護学実習では、病院だけでなく重症心身障害児施設の1日見学実習も行っている。

重症心身障害児施設実習では、初めは障害をもつ子どもとのかかわりに困難を感じる学生も多いが、そのような困難を乗り越えたり、考えたりすることは、貴重な体験となり、学びや看護観を深める機会となる<sup>1)</sup>。さらに、重症心身障害児への看護は、観

察や必要なケアを最小限の苦痛で行う技術、生活の質をより豊かにするための技術、子どもと家族の気持ちに寄り添う心が必要であり、これらは看護の基礎と言える<sup>1)</sup>。このように、重症心身障害児施設実習は、学生自身が考えてこそ得られる多くの気づきや学びをもたらすとともに、看護の基本を振り返る機会になると考えられる。

そこで、平成25年度の重症心身障害児施設見学実習における学生の学びを分析することにより、次年度の小児看護学実習における重症心身障害児施設見学実習のあり方を検討することを目的として、本研究を行った。

受稿：2014年7月14日 受理：2014年11月17日

<sup>1</sup> 広島都市学園大学健康科学部看護学科

〒734-0014 広島市南区宇品西五丁目13-18

## 2. 目 的

重症心身障害児施設見学実習における学生の学びを質的に分析することにより、次年度の小児看護学実習における重症心身障害児施設見学実習のあり方を検討する。

## 3. 方 法

### 3.1 研究手続き

- 1) 重症心身障害児施設見学実習（以下、見学実習）は、3年次生の小児看護学実習の一部として実施した。
- 2) 見学実習の事前準備として、学生へ重症心身障害児（以下、重症児（者））についての講義とビデオ視聴を行い、「重症心身障害児の特徴・療育について」のレポート（事前学習）を提示した。
- 3) 実習期間：8月末～9月初旬
- 4) 学生12～14名を1グループとし、3ヶ所の実習施設のうち1施設に割り当てた。
- 5) 見学実習の目標は、以下の4点である。
  - (1) 重症心身障害児施設の機能を知る
  - (2) 重症心身障害児の特徴を知り、重度の障害をもつ子どもたちの生活環境を知る
  - (3) 重症心身障害児への支援（健康管理・発達支援）と家族支援について学ぶ
  - (4) 医療・福祉・保健チームの連携について学ぶ
- 6) 見学実習当日は、施設の概要説明の後、保育や活動場面、昼食の見学を通して、重症児（者）と触れあった。見学実習後、カンファレンスを行い、臨地実習指導者（以下、実習指導者）、担当教員とともに、学生間での学びの共有を行った。
- 7) 見学実習終了後、学生は、「重症心身障害児施設における看護について」というレポートを提出した。

### 3.2 対象者への研究手順

見学実習後のレポート提出後、学生に、本研究の目的や方法、プライバシー遵守などについて口頭と文書で説明し、研究への参加協力を求めた。

### 3.3 研究期間

2013年9月～2014年5月

### 3.4 研究対象

A 大学看護学生で、平成25年度の小児看護学実習において重症心身障害児施設見学実習を行った学生117名のうち、研究参加の同意が得られた97名のレポート「重症心身障害児施設における看護について」の記述内容を対象とした。

### 3.5 分析方法

学生のレポートに記述された内容を、一文にひとつの意味内容を含むようコード化し、類似するものを統合し、1次コードを作成した。さらに、主題が明確になるまで統合を繰り返し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。分析は、共同研究者間で繰り返し検討し、内容の信頼性と妥当性に努めた。

### 3.6 倫理的配慮

学生には、口頭と書面により、研究の趣旨や方法、研究参加は自由意志であり研究参加後の辞退が可能であること、参加辞退により不利益は生じないこと、研究参加の有無は成績評価には影響しないこと、データは個人的情報が特定されないように匿名としコード化した上で分析すること、本研究以外の目的では使用しないこと、研究結果の公表などについて説明を行い、書面にて同意を得た。

なお、本研究は、大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 第1311号）。

## 4. 結 果

得られた全コード数は1281であった。

学生の記述内容を分析した結果、【重症児（者）の特徴の理解】（コード数128）、【重症児（者）が生活する環境の理解】（350）、【重症児（者）とのかかわり方】（135）、【重症児（者）に必要な看護援助】（399）、【家族への看護支援】（143）、【看護観の深まり】（126）という6つのカテゴリーが抽出された（Table 1）。

以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは〈〉、1次コードは「」、具体的記述内容は“ ”で示す。

Table 1 重症心身障害児施設見学実習における学生の学び

| カテゴリー            | サブカテゴリー            | コード数 |     |
|------------------|--------------------|------|-----|
| 重症児（者）の特徴の理解     | 重症児（者）の身体的・機能的障害   | 54   | 128 |
|                  | コミュニケーション手段が非言語的   | 48   |     |
|                  | 人権ある一人の存在          | 26   |     |
| 重症児（者）が生活する環境の理解 | 重症児（者）の安全・安楽を考えた設備 | 113  | 350 |
|                  | 重症児（者）のことを考えた環境づくり | 144  |     |
|                  | 多職種が連携している         | 36   |     |
|                  | 職員と重症児（者）の深い関係性    | 13   |     |
|                  | 様々な機能をもつ施設         | 44   |     |
|                  | 非言語的コミュニケーションが大切   | 45   |     |
| 重症児（者）とのかかわり方    | 特別な方法でなくても良い       | 5    | 135 |
|                  | 一人ひとりに合った方法で接する    | 1    |     |
|                  | 相手を受け入れる           | 49   |     |
|                  | 相手の反応から思いを読み取る     | 26   |     |
|                  | 信頼関係を築く            | 9    |     |
|                  | 安全・安楽を考えた看護        | 80   |     |
| 重症児（者）に必要な看護援助   | 個別性を考える            | 48   | 399 |
|                  | 細やかな観察とアセスメント      | 63   |     |
|                  | 根拠に基づいた看護          | 25   |     |
|                  | スタッフ間の情報共有と連携      | 38   |     |
|                  | 「できること」を伸ばす援助      | 57   |     |
|                  | 五感を刺激するかかわり        | 46   |     |
|                  | 健康維持と健康管理          | 42   |     |
|                  | 家族の思いを知る           | 31   |     |
| 家族への看護支援         | 家族の心のケア            | 16   | 143 |
|                  | 話しやすい環境作り          | 12   |     |
|                  | 情報や資源の提供           | 21   |     |
|                  | 家族の思いを尊重           | 21   |     |
|                  | 家族の絆を保つ支援          | 37   |     |
|                  | 家族の状態を把握           | 3    |     |
|                  | 信頼関係の形成            | 2    |     |
|                  | 看護の基本を振り返る         | 29   |     |
| 看護観の深まり          | 「自分自身」を振り返る        | 5    | 126 |
|                  | 自己の看護を考える          | 92   |     |

#### 4.1 重症児（者）の特徴の理解

コード数 = 128

【重症児（者）の特徴の理解】は、〈重症児（者）の身体的・機能的障害〉〈コミュニケーションの手段が非言語的〉〈人権ある一人の存在〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、重症児（者）には、「身体的・機能的な障害がある」ことや、「一人ひとり障害の程度が異なっている」ことに気付いた。そして、重症児（者）は「誰かの介助が必要」であると感じた。学生は、このように〈重症児（者）の身体的・機能的障害〉について認識していた。

学生は、重症児（者）は「言語的コミュニケーションを図れる人が少ない」、言葉で「自分で思いを伝えることができない」と感じていた。しかし、「表情や動作で感情表現をしている」ことに気づき、想

像していたよりも「表現方法が素直で豊か」で、「周囲の様子を敏感に感じ取っている」ことに気付いた。学生は、重症児（者）の〈コミュニケーションの手段が非言語的〉であることを認識していた。

学生は、重症児（者）が〈人権ある一人の存在〉であると感じた。重症児（者）は、「たとえどんな障害をもっている人も1人の人」であり、「人権尊重の大切さ」を実感していた。そして、重症児（者）は「教育を受ける権利がある」と認識していた。また、オープンフロアで過ごす重症児（者）を見学し、「プライバシーの配慮」について考えていた。

#### 4.2 重症児（者）が生活する環境の理解

コード数 = 350

〈重症児（者）の安全・安楽を考えた設備〉〈重症児（者）のことを考えた環境づくり〉〈多職種が連

携している〉〈職員と重症児(者)の深い関係性〉〈様々な機能をもつ施設〉の5つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、施設が「転倒転落予防に配慮した設備」であり、「重症児(者)が一人で院外に出ない」ように配慮するなど、「重症児(者)の特徴を考慮した設備」となっていることに気付いた。そして、重症児(者)を「常に観察できる環境」であり、「緊急時に対応しやすい環境」であると感じていた。重症児(者)一人ひとりに合った「個性のある道具」が使用されていることも認識していた。このように学生は、重症児(者)の生活環境が〈重症児(者)の安全・安楽を考えた設備〉であることを学んでいた。

学生は、「視覚刺激を考慮した大きな窓」や「季節感のある飾りつけ」など、室内で生活することの多い重症児(者)が「室内でも楽しめるような工夫」がされていることに気付いた。「好きなものに囲まれた居室」など「家庭のような環境」が整えられていた。さらに、「メリハリのある生活」を送ることで、毎日を単調にしない工夫や「普通の子どもと同じ生活」ができるような工夫がされていることを捉えていた。このように〈重症児(者)のことを考えた環境づくり〉がされていることを学んでいた。

そして、一人の重症児(者)の生活を支えるために、「多職種が専門性を活か」し、「多職種連携によるより良い支援の提供」が行われており、〈多職種が連携している〉ことを捉えていた。

学生は、見学実習を通して、重症児(者)への「職員の愛情」を感じた。「職員には家族役割もある」と感じ、「(重症児(者)の)人生を受け持っている」重要な存在であると考えた。そして、「職員も環境の一部」であり、重症児(者)に影響を与える存在であると捉えており、〈職員と重症児(者)の深い関係性〉を感じていた。

また、重症児(者)施設が、「生活、治療、療養の場」、「五感を刺激する育ちの場」、「学びの場」など〈様々な機能をもつ施設〉であることを認識していた。

#### 4.3 重症児(者)とのかかわり方

コード数 = 135

【重症児(者)とのかかわり方】は、〈非言語的コミュニケーションが大切〉〈特別な方法でなくても良い〉〈一人ひとりに合った方法で接する〉〈相手を受け入れる〉〈相手の反応から思いを読み取る〉〈信頼関係を築く〉の6つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、「コミュニケーションは言葉だけではない」ことに気付き、「目線を合わせて接する」、「触れることも大切」など、「非言語的コミュニケーションの大切さ」を感じていた。重症児(者)とのかかわりには〈非言語的コミュニケーションが大切〉であると実感していた。

学生は、重症児(者)だからといって「特別なコミュニケーションが必要なわけではない」と、コミュニケーションの基本を大切にすれば、かかわり方は〈特別な方法でなくても良い〉と感じていた。その中で、重症児(者)〈一人ひとりに合った方法で接する〉必要があると感じていた。

学生は、重症児(者)とかわかるにあたり、「先入観・偏見をもたない」、「対象を理解しようとする気持ち」が大切であり、「自分から心を開く」など〈相手を受け入れる〉気持ちの重要性を認識していた。

重症児(者)とのかかわりには、「相手の反応をよく見る」と「相手の反応に気付くこと」が必要であり、〈相手の反応から思いを読み取る〉ことが重要であると捉えていた。重症児(者)の反応を読み取るためには、〈信頼関係を築く〉ことも必要であると認識していた。

#### 4.4 重症児(者)に必要な看護援助

コード数 = 399

【重症児(者)に必要な看護援助】は、〈安全・安楽を考えた看護〉〈個性を考える〉〈細やかな観察とアセスメント〉〈根拠に基づいた看護〉〈スタッフ間の情報共有と連携〉〈「できることを伸ばす援助」〉〈五感を刺激するかかわり〉〈健康維持と健康管理〉の8つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、「身体損傷を予防する工夫」や「安全を確保する環境作り」、「危険を予測した看護」など〈安



全・安楽を考えた看護〉の実際を学んだ。また、思いを言語的に訴えることのできない重症児（者）に対して、「苦痛の少ない援助」も必要であると感じた。

学生は、「個別性のある援助」を提供するために、「個別の特徴を理解することが大切」だと認識していた。学生は、重症児（者）の〈個別性を考える〉看護の実際と重要性を学んでいた。

重症児（者）は、言葉で自分の思いを伝えることが難しいため、看護師の「観察力が必要」である。重症児（者）の「少しのサインを見逃さない」ためには、「毎日の観察が大切」であり、「アセスメント能力が必要」であると捉えていた。重症児（者）の看護において、〈細やかな観察とアセスメント〉が行われていることを学んだ。

学生は、「科学的根拠を持った看護実践」について説明を受け、「根拠を持って看護する大切さ」を実感し、〈根拠に基づいた看護〉が行われていることを認識していた。

学生は、「統一したケアを提供する工夫」を見学し、「情報共有が重要」であると感じ、多職種がかかわる重症児（者）看護における〈スタッフ間の情報共有と連携〉の重要性を実感していた。

重症児（者）の成長発達を促すためには、「できることに目を向ける」ことが大切である。「できることはしてもらう」、「見守るという看護」など、「QOL 向上につながるかわり」を見学することで、重症児（者）の〈「できること」を伸ばす援助〉が大切であり、そのためには、「意欲を高める援助」も必要であると感じていた。

重症児（者）の経験が乏しくなることを防ぐため、〈五感を刺激するかかわり〉がされていることを学んだ。「五感を刺激するおもちゃ」の使用や「感覚が刺激される環境の提供」がされていることを知った。また、「声掛けを行いながらケアする」ことも五感刺激のひとつだと認識していた。

そして、重症児（者）が豊かな生活を送るためには、重症児（者）の「健康維持が大切」であることに気付いた。そのために、「感染を広げない対策」が行われており、「職員自身の感染対策も必要」であると気付いた。学生は、免疫力の低い重症児（者）に対する看護において、〈健康維持と健康管理〉の

重要性を実感していた。

#### 4.5 家族への看護支援

コード数 = 143

【家族への看護支援】は、〈家族の思いを知る〉〈家族の心のケア〉〈話しやすい環境づくり〉〈情報や資源の提供〉〈家族の思いを尊重〉〈家族の絆を保つ支援〉〈家族の状態を把握〉〈信頼関係の形成〉の8つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、居室が“親の願いがこもったものが飾られており、愛情で満ち溢れていた”ため、「ベッド周囲から家族の思いが伝わる」と感じた。居室の様子や、実習指導者の説明、家族と重症児（者）のかかわりから、家族の重症児（者）への「愛情の大きさ」や「子どもに対する強い思い」、「様々な葛藤がある」ことを知った。このように、学生は、〈家族の思いを知る〉ことができた。

そして、学生は、「家族の思いに耳を傾ける」ことの大切さや「家族の支えとなる」、「家族に寄り添う」など〈家族の心のケア〉の重要性も認識し、「職員の顔写真を貼ることで相談しやすい雰囲気作り」などの〈話しやすい環境作り〉の実際を学んだ。

学生は、保護者会や勉強会などを通して、家族への「情報を提供」するとともに、「親同士が関われる場の提供」がされていることを知った。また、在宅で暮らす重症児（者）の家族にとって、短期入所などは「施設を利用し負担軽減」につながることを知り、〈情報や資源の提供〉も重要な看護のひとつであることに気付いた。

学生は、「家族が納得できる支援の提供」など〈家族の思いを尊重〉した看護の実際を知り、その重要性を感じていた。

学生は、「家族と重症児（者）を結ぶ」支援や重症児（者）の「ケアへの参加」を促すかわりについて説明を受け、家族から離れて暮らす重症児（者）と〈家族の絆を保つ支援〉の実際を学んだ。また、「家族関係の調整」をしていくことも大切だと感じた。

家族の支援をするためには、「家族の変化に気付く」など〈家族の状態を把握〉することが大切であることに気付き、同時に、〈信頼関係の形成〉の重要性を認識していた。

#### 4.6 看護観の深まり

コード数 = 126

【看護観の深まり】は、〈看護の基本を振り返る〉〈「自分自身」を振り返る〉〈自己の看護を考える〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、見学実習を通して、「患者理解の大切さ」や「個別性の大切さ」、「観察やコミュニケーションを図りながらケアを行う大切さ」を再認識し、「看護の基礎は信頼関係」であるなど、〈看護の基本を振り返〉っていた。

学生にとって、見学実習は「目指す看護師像を思い出すきっかけ」になっていた。そして、「自分自身に対する気づき」の場ともなっており、〈「自分自身」を振り返る〉機会にもなっていた。

学生は、見学実習を通して、〈自己の看護を考え〉ていた。目指したい看護として、重症児（者）の看護から学んだ「観察力を身につける」、「根拠ある看護」、「個別性ある看護」、「患者を尊重した看護」、「家族の看護」などが挙げられ、「知識・技術の向上」をしなければならないと感じていた。そして、看護師として「豊かな人間性」を育みたいと考えていた。

### 5. 考 察

#### 5.1 重症児（者）施設見学実習における学生の学び

##### 5.1.1 重症児（者）の特徴と生活環境

学生は、〈重症児（者）の身体的・機能的障害〉や〈コミュニケーション手段が非言語的〉であるという重症児（者）の特徴を捉え、【重症児（者）の特徴の理解】をしていた。実際に重症児（者）と出会うことで、事前に学習した知識との関連づけができたようであった。そして、重症児（者）一人ひとりの個別性についても学びを深めていた。さらに、重症児（者）は〈人権ある一人の存在〉であると、人権についても実感していた。重症児（者）施設実習では、学生の人間観の変化が見られるという報告<sup>2)</sup>がある。本研究からも類似の結果が見られた。

【重症児（者）が生活する環境の理解】は、コード数 350 であり、学生一人につき複数の記述が得られたことがわかる。重症児（者）施設には、学生が今まで実習をした一般の病院とは異なる環境（施設設備）がある。その環境に学生が疑問や興味をもっ

て見学を行っているところへ、指導者の説明が加わることにより、強く印象に残り、記述数が増えたと考えられる。重症児（者）施設は、重症児（者）の特徴に合った〈重症児（者）の安全・安楽を考えた設備〉を備えており、その中で、職員や家族により〈重症児（者）のことを考えた環境づくり〉がされているという、ハード・ソフト両面から生活環境を捉えることができていた。また、〈職員と重症児（者）の深い関係性〉から、職員の家族にも似た愛情を感じ取ると同時に、施設が重症児（者）の生活の場であること、職員自身も環境の一部であることを捉えていた。

〈多職種が連携している〉ことも気付くことができていた。これは、多職種が重症児（者）にかかわる場面や情報共有の工夫など、多職種連携の実際を見ることができたためであると考えられる。

##### 5.1.2 重症児（者）とのかかわりと看護援助

学生は、重症児（者）が、想像していたよりも鮮明に感情を表現していることを感じていた。学生は、重症児（者）から反応が得られた時、重症児（者）を理解し接近できたと感じ、大きな喜びを得<sup>3)</sup>、さらなる反応を見出したいという欲求、相手をもっと理解するための努力といった積極的行動への動機付けにつながる<sup>4)</sup>。つまり、学生が、重症児（者）の反応に気付くことは、その後のかかわりへの動機付けとなる。そのため、早期に、学生が重症児（者）の反応に気付けるような助言を行うことが重要となる。

〈相手を受け入れる〉〈相手の反応から思いを読み取る〉〈信頼関係を築く〉などは、コミュニケーションの基本でもある。重症児（者）とのかかわりを考えることが、学生にとって、コミュニケーションの基本を振り返る機会となり得ることが明らかになった。

【重症児（者）に必要な看護援助】は、コード数 399 と最も多く、中でも、〈安全・安楽を考えた看護〉が多かった。特に、身体損傷予防などの実際の取り組みは、重症児（者）の生活環境と同様、学生が今まで目にしたことがないため、新鮮に感じ、印象に残ったと考えられる。初めて目にすることに對するインパクトの強さが明らかになった。

学生は、〈細やかな観察とアセスメント〉の重要性を捉えることができていた。自分の訴えをうまく伝えることができない重症児（者）の看護において、看護師の細やかな観察力とアセスメントは不可欠である。そして、観察とアセスメントは、全ての患者に対して看護支援を行う上で必要不可欠であり、看護の基本であるとも言える。重症児（者）施設実習は、学生にとって、看護の基本を振り返る機会となることが示唆された。

学生は、成長発達過程にある重症児（者）の看護に必要な【「できること」をのばす援助】の視点にも気付くことができていた。重症児（者）施設実習前後の学生のレポートを分析した新井<sup>5)</sup>は、実習前では身体的能力の限界について記述が多く、実習後には、障害者が持っている可能性を肯定するフレーズへと変化したと述べている。重症児（者）と出会い、かかわることにより、実習前とは違う愛情ある視点で重症児（者）を捉え、重症児（者）の限界ではなく、可能性に目を向けることができるようになるためであると考えられる。このことから、実際に重症児（者）と出会うことやかかわることの重要性が示唆された。

### 5.1.3 重症児（者）の家族への看護支援

学生は、〈家族の思いを知る〉ことで、〈家族の心のケア〉が大切であること、〈家族の絆を保つ支援〉の実際を学んでいた。しかし、得られたコード数は143であった。実習中、実際に家族とかかわったり、重症児（者）と家族のかかわりを目にした学生は少数であった。そのため、実感を得にくく、記述内容が少なかったと考えられる。関森<sup>6)</sup>も、「家族・地域とのつながり」についての記述内容が少ないという結果を得ており、これは、児と家族のかかわりの様子や看護者と親子とのかかわり方など、実際の場面を見学する機会が少なかったためだと分析している。しかし、学生は、実習指導者から説明を受け、重症児（者）だけでなく、家族も看護の対象であることに気付くことができていた。患者本人だけでなく、家族も含めて看護を行うという視点に気付く機会となったと言える。

### 5.1.4 看護観の深まり

目指す看護については、【重症児（者）に必要な

看護援助】で得られたサブカテゴリーに共通する記述が多かった。学生は、見学実習を通して学んだ看護援助を、「自分の目標とする看護」へと転換しているのだと言える。短時間の見学であっても、「重症児の理解と共に学生個々の看護に対する概念の拡大」につながり、学生は知識・技術の向上を目指し看護師になる決意を新たにし、また将来の進路を考えるきっかけとなる<sup>7)</sup>。重症児（者）施設の見学実習を行うことは、自己を振り返り、看護観を考え、深める機会にもなると考えられる。

## 5.2 重症心身障害児施設見学実習の課題

抽出されたコード数から学生の学びを検討すると、【重症児（者）に必要な看護援助】は399、【重症児（者）が生活する環境の理解】は350と特に多かった。今まで目にすることがない設備や環境、そして看護援助は、学生が興味を持ちやすく、目に留まりやすいものである。そこに実習指導者の説明が加わることで印象に残り、記述が増えたと考えられる。「実際に目にしたこと」と実習指導者の「説明内容」が合致することで、「目にしたこと」が、学生の印象に残ることが示唆された。これは、実習指導者の説明により、「目にした現象の意味」を学生が理解できたためであると考えられる。しかし、学生のレポートは、説明された内容をそのまま記述し、「自分自身がどう考えたか」という記述が少ない傾向があった。自分自身が考えてこそ得られる学びは、記憶に残るものである。「目にしたこと」の意味を、学生自身が考え、その根拠に気付くことができるような助言を行うなど、「目にしたこと」や「説明されたこと」を学生自身が、意識的に学びに変えることができるような教育的かかわりを行う必要がある。

【重症児（者）の特徴の理解】【重症児（者）とのかかわり方】【家族への看護支援】のコード数は、【重症児（者）に必要な看護援助】【重症児（者）が生活する環境の理解】の半数程度であった。【家族への看護支援】については、説明が主体であり、実際に家族とかかわることのできた学生は少ない。また、重症児（者）とかかわる時間も限られており、職員と重症児（者）のかかわりを見学したのみの学生もいる。学生自身が実際に体験をしていないため、実



Table 2 実習目標に関連するカテゴリーとコード数

| 実 習 目 標 |                       | 関連するカテゴリー            | コード数 |
|---------|-----------------------|----------------------|------|
| 1       | 重症児（者）施設の機能を知る        | 〈様々な機能をもつ施設〉         | 44   |
| 2       | 重症児（者）の特徴を知る          | 【重症児（者）の特徴の理解】       | 128  |
|         | 重度の障害をもつ子どもたちの生活環境を知る | 〈重症児（者）の安全・安楽を考えた設備〉 | 270  |
|         |                       | 〈重症児（者）のことを考えた環境づくり〉 |      |
| 3       | 重症児（者）への支援について学ぶ      | 【職員と重症児（者）の深い関係性】    | 399  |
|         | 家族支援について学ぶ            | 【重症児（者）に必要な看護援助】     |      |
| 4       | 医療・福祉・保健チームの連携について学ぶ  | 【家族への看護支援】           | 143  |
|         |                       | 〈多職種が連携している〉         | 36   |

感を伴う気付きが得られにくく、学生の記述が少なくなった可能性がある。

新井<sup>5)</sup>は、実習後レポートでは、学生が体験したことに関するフレーズが、増加したと報告している。このことから、学生が実際に体験することのインパクトの強さがわかる。永島ら<sup>8)</sup>は、実習期間が1日であっても、一人の子どもを受け持つと、じっくりとかかわることができ、学生が子どもの理解を深め、最適な援助を考えることに繋がったと述べている。これらのことから、学生自身が実際に体験し、実際に重症児（者）や家族とかかわることの学習効果の高さがうかがえる。次年度は、重症児（者）や家族とかかわる時間を増やす、家族の話を聞く機会を設けるなど、学生が実際の体験の中から、自ら考え、体験したことの意味づけができる実習方法を検討していく必要がある。

実習目標に関連したカテゴリーが、それぞれ抽出されたことから、学生は、実習目標についての学びを得ることができたと考えられる（Table 2）。

しかし、実習目標に関連したカテゴリーのコード数を分析すると、〈様々な機能をもつ施設〉は44、〈多職種が連携している〉は36と少ないことが明らかになった。施設のもつ機能は説明が主であり、「実際に目にしたこと」の方がより印象に残ったため、記述が少なくなったと考えられる。また、多職種連携については、特徴的なことに目が留まりやすい学生にとっては、「普通のこと」として見逃されてしまった可能性も考えられる。実習直後のカンファレンスを活用し、施設のもつ機能や多職種連携に関して、意識的に考えることができるよう助言を行う必要がある。

今回の見学実習は、学生が自己や看護について振

り返る機会にもなっていた。このように、重症児（者）施設見学実習は、1日であっても、小児看護学に関する学びを超え、学生の人間観、看護観にも影響を及ぼす可能性を秘めた、意義深いものであると考えられる。

## 6. 結 論

重症児（者）施設見学実習後の学生のレポートを分析した結果、以下の結果を得た。

- 1) 【重症児（者）の特徴の理解】【重症児（者）が生活する環境の理解】【重症児（者）とのかかわり方】【重症児（者）に必要な看護援助】【家族への看護支援】【看護観の深まり】という6つのカテゴリーが抽出された。
- 2) 【重症児（者）に必要な看護援助】、【重症児（者）が生活する環境の理解】についての記述が多かった。「実際に目にしたこと」と「説明内容」が合致することで、「目にしたこと」が学生の印象に残ることが示唆された。
- 3) 「目にしたこと」の意味を、学生自身が考え、気付くことができるような助言を行うなど、「目にしたこと」や「説明されたこと」を学生自身が意識的に学びに変えることができるような教育的かかわりを行う必要がある。
- 4) 次年度は、重症児（者）や家族とかかわる時間を増やすなど、学生が実際の体験の中から、自ら考え、体験したことの意味づけができる実習方法の検討が必要である。

## 謝 辞

本研究にご協力頂きました学生の皆様に感謝致します。また、学生の実習を快く受け入れ、丁寧なご



指導をしてくださいました実習施設の皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 眞鍋裕紀子. 重症心身障害児（者）施設における学生実習. 小児看護 2011; 34 (5): 661-665.
- 2) 清水史恵. 小児病棟以外の場における小児看護学実習での学生の学びに関する国内文献の検討. 日本小児看護学会誌 2012; 21 (3): 71-77.
- 3) 大木伸子, 出野慶子, 本間照子. 看護学生が認識した重度の障害をもつ人への接近過程とその要因. 東邦大学医学部看護学科紀要 2006; 20: 37-45.
- 4) 高田直子, 新井龍, 井村香積, 作田裕美, 坂口桃子. 看護学生における「患者の人権・看護倫理の重要性」感得のプロセス—「基礎看護学実習Ⅰ」を通して—. 滋賀医科大学看護学ジャーナル 2009; 7 (1): 31-34.
- 5) 新井龍, 高田直子, 井村香積, 作田裕美, 遠藤知典, 坂口桃子. 「患者の人権と看護の倫理」に関する体験的学習の効果の検討—実習前後レポートの内容分析から—. 滋賀医科大学看護学ジャーナル 2009; 7 (1): 23-26.
- 6) 関森みゆき, 阪口しげ子. 重症心身障害児施設見学実習における看護学生の学び. 信州大学医療技術短期大学部紀要 2000; 25: 29-37.
- 7) 高橋和恵. 重症心身障害児施設の見学による看護学生の学び. 日本看護学会論文集 看護教育 2006; 37: 230-232.
- 8) 永島美香, 女鹿瞳, 勝田仁美. こども看護実習における重症心身障害児施設実習の意義—実習での学生の学びから—. 近大姫路大学看護学部紀要 2010; 3: 51.

# Examination of teaching methods during pediatric nursing theory study in university of nursing

— Analysis of students' learning at institutions for people with severe motor and intellectual disabilities —

Rieko FUJIWARA<sup>1</sup>      Miyuki IMAMURA<sup>1</sup>      Hitomi UENO<sup>1</sup>  
Masayo YAMADA<sup>1</sup>      Yumi YUMITORI<sup>1</sup>

## Abstract

The objectives of this study are to analyze what the students learned from the study visit to institutions for people with severe motor and intellectual disabilities (“severe people” hereafter) and to examine future methods for pediatric nursing theory study.

Based on qualitative analysis of student reports after the study visit, six categories were identified: understanding of characteristics of severe people; understanding of living environment of severe people; relation with severe people; nursing support to severe people; nursing support for family members; and development of views on nursing.

Through analysis of descriptions, it was suggested that students were likely to have a strong impression of what they observed firsthand when the guide provided an explanation. It is necessary for faculty members and guides to give educational approaches to students so that students can reflect and learn consciously from what they observed and provided explanations. In addition, it is important to investigate practical methods that allow students to have firsthand contact with severe people and family members and enable them to learn from those experiences.

**Key words:** institution for people with severe motor and intellectual disabilities, pediatric nursing theory study, student learning

---

<sup>1</sup> Department of Nursing, Faculty of Health Science, Hiroshima Cosmopolitan University  
5-13-18 Ujinanishi, Minami-ku, Hiroshima 734-0014, Japan